**―20140822都退職校園長会千代田・中央支部研修会―**

**ネパールの子どもたちに　 ―楽しい保育教材の模索―**

**西　田　鏡　子**

認定NPO法人日本ネパール女性協会（JNFEA）の岩谷栄子氏に誘われてネパール行きを決め、その後、同『ポカラ・プロジェクト』のカニヤ・キャンパス・ポカラ（女子大学）に通うさくら寮生を対象に保育についての授業をすること、また、続いて後日には、さくら寮卒業生の赴任先の　　　　　　小学校5～6年生を対象に保育をすることを承諾した。

教育は「はじめに子どもありき。子どものために行われるもの」である。この理念に揺らぎはなく、誇りをもって現職時代を過ごしてきた。しかし今回は、ネパールの子どもたちのことを知らずしての保育実践である。いったいどのような実践ができるのであろうか。少ない情報の中で想像を膨らませて事前準備を進めた。

**１　ネパールについての理解**

　私がこれまでネパールについて知っていることといえば、『世界の屋根ヒマラヤ』『昨年、三浦雄一郎氏が80歳登頂記録を樹立したエベレスト』『昔、S・マックイーンとJP・ベルモント主演の冒険映画で見たカトマンドゥ』等であった。

幸いにも、都退職校園長会千代田・中央支部に在籍したこの2年の間に、数度、岩谷氏よりネパールの教育、及びJNFEAの活動について映像や紙面で情報をいただく機会があったが、実のところわが身がネパールを訪問し保育実践をすることになろうとは思ってもいなかったので、おおよそのイメージをもつに留まっていた。

そこで、保育実践につなげる“ネパールの子どもの実態”“ネパールの子どもを取り巻く環境実態”について少しでも手がかりを得たいと、旅立ちまでの短い間であったが岩谷氏提供の情報の復習と関連図書により事前研修を進めた。内容については紙面の都合上省略するが、下記に主なキーワードを記述しておく。

**【ネパールという国】**

＜日本の南西約5,000㎞に位置、気候は沖縄と同じぐらい＞＜面積は北海道の1.8倍＞＜人口は日本の約4分の一＞＜55％が一日1.25米ドル以下の生活＞＜農業依存が大＞＜工業生産の中心は農産物の加工・織物カーペット生産・近年注目商品パシュミナ＞＜観光産業・エベレストをはじめとするヒマラヤ登山やトレッキング・ネイチャーツアーやエコツアー・世界遺産カトマンドゥやパタンやバクタプル＞

**【ネパールの教育】**

＜ネパールの教育史…1951年王政復古の後、教育省が設立され一般庶民への教育行政が整備＞＜現在のネパール教育制度…小学校5年、中学校3年、高等学校2年、10+2教育2年の5-3-2-2制＞＜小学校に90％の子どもが入学するが卒業率は低い…子どもは貴重な労働力、学費が払えない等＞＜教育機会の男女格差…女性に教育は不要という考え方＞＜教育機会の地域格差…カトマンドゥと地方、特に山間部（通学に数時間かかる）＞＜低い識字率…カトマンドゥと山村部との格差＞＜教師がいない・教師の質の向上＞＜最低限の教育環境が整っていない＞＜修学前教育…記載少なく「ほとんどが私学」岩谷氏資料では国内4032校で58％が私立＞

**２　教材選択**

事前に岩谷氏より伺っていたことは、＜さくら寮卒業生である先生にヒントとなる保育実践を＞＜対象は小学校5～6年生・夏休み中のため集まる人数は10～15名。多くても25名ぐらい＞＜45分間＞＜私たちが行くのを待っていてくれる＞＜通訳あり＞＜何もない＞という情報と、さくら寮生たちには＜教師となった時のヒントとなる遊びの提供＞をしてほしいという要望であった。

子どもは万国共通とはいうけれど…好きなものは何？好きな遊びは何？…教室環境は床？長机と長椅子？個人机と個人椅子？その他活動できる広い場所はある？と疑問だらけであった。“行ったところ勝負”の感は否めないが、それでも最大限の想像力を働かせ、以下を選択した。

1. **導入に代えて・・・『握手した人だあれ？』**

“幼児教育はまずは教師との信頼関係が基盤”…初めて会う子どもたちに、まずは親しみをもってもらうために、①ナマステ！②ぬいぐるみを使っての活動を選択

1. **主な活動・・・『椅子取りゲーム』**

わかりやすく、すぐできて、アクション付で、面白いものを。お話系？制作系？体操系？ゲーム？…音楽なし、材料なしの条件でできるものと考え、椅子取りゲームに決定！椅子は長椅子でも、そして、床でも、緑陰でも。音楽は同行の藤田氏持参のキーボードを借用、なければ歌でも、手拍子でも。念のためカスタネットを持参。

1. **まとめに代えて…エプロンシアター『三匹の子豚』**

この国の未来に「みんなで力を合わせてがんばってほしい」との願いを込めて『大きな蕪』をエプロンシアターで演じる。

**（４）さくら寮生には…**（１）（２）は資料（別紙資料2）配布と教材選択についての簡単な説明をする。（３）の実演のほかに、紙と割り箸で作ったペープサート『三匹の子豚』の提示と、身近な自然材料バナナの葉を使ったペープサート『三匹の子豚』を実演する。

**３　実践（〇）と評価（◇）**

　ネパールガンジー空港から降り立ち、揺られ揺られての車窓風景は、カトマンドゥとは一変し田園風景が続いた。泥壁の家・藁作りの小屋・二頭の牛を引いての田んぼ扱き…なぜか懐かしい。記憶をたどれば…どこで見たのであろう、明治・大正時代のセピア色の写真であったような気もする。そしてそんな風景と対照的な只今工事中のネパール縦断道路！いったい片道何車線になるのであろうか幅広く、どこまでもまっすぐである。片道のどちらかが平坦に整えられた状況ではあるが、一方の片道はまだまだの状況で、車と人と物売りの自転車とリキシャと牛と、そしてカトマンドゥと違うのは馬車も一緒に走っている。誰もが皆、一瞬の注意不足が事故につながるこの状況。車の隣を走る馬の目は引きつっている。事故と背中合わせ、今日も無事は奇跡と感じるような環境の中で暮らしている。

　この様相は本道路をそれるとすぐに一変し、草生い茂りカモが散歩するのどかさに。校門までの道は朝までの雨でドロドロぐちゃぐちゃ。気が付くと、学校の窓をよじ登ってこちらを覗く顔！顔！きかん坊主たちは、どこの国でもかわいい笑顔である。

　Banke郡Gyanjoti H S School小学校、 迎えてくれたのは80人！それも4歳ぐらいから15、6歳？と思われる年齢幅！事前情報と全く違うこの状況で…うーん、なんとかやりましょう！やらねばならない！と実践！

**（１）『握手した人だあれ？』**

**〇**『目隠しをしたぬいぐるみが匂いだけで握手した相手を導き出す』という理解は十分でなく、面白さまでには至らなかったと思われるが、一人ひとりに“ぬいぐるみ人形に触れてもらう嬉しさ”は感じてもらえたのではないかと推測する。

**◇**十分な時間と少ない人数であれば十分楽しめると考えるが、一人ひとりへのスキンタッチへの衛生上の配慮は必要である。

**（２）『椅子取りゲーム』は2部制に**

**〇**人数が多く狭い空間なので長椅子を二重円に並べ、中央円の子と外円の子に分けて実施。準備には3人の同行者、通訳、小学校の先生、皆さんがお手伝いしてくださる。また、ルール説明時には同行の藤田氏がユーモラスにモデリングしてくださったお蔭で、さしたる混乱もなく開始することができたが、あまりにも狭い場所で自由のない動きに、“怒涛！の椅子取りゲーム”となる。けなげに動き続けてくれた子どもたちに感謝！である。

**◇**椅子取りゲームは、広い空間・音楽などの条件が揃えば80人でも楽しく活動できると思われる。45分授業ということでアクションを伴ったものを選択したが、今回の状況の80人であれば、全体対象の『ボディパーカッション』などの方が適していたように感じる。

1. **エプロンシアター『大きな蕪』**

**〇**ここに至るまで国内でエプロンをした人を見たのは、カトマンドゥ空港近くのパシュミナ工場での女性一名だけであった。そもそもエプロンシアターはお母さんが子どもにやってあげるような小集団の環境に適している。ここでも80人！は疑問であったが、エプロンから次々に出てくるかわいいお人形に子どもたちは目を奪われていた。

**◇**今日はかわいいお人形を見たという楽しさだけであろうが、願わくば、いつか「みんなで力を合わせて、この国の未来に向けて頑張ってほしい」という『大きな蕪』選択の意図が通じますように。

**（４）バナナの葉を使ったペープサート『三匹の子豚』…さくら寮生対象**

**〇**ネパール旅行中、カトマンドゥの煉瓦の建築物、ネパールガンジーの泥壁の家、藁ぶきの家は私にとって印象深いもののひとつであった。こうした環境にあって、木・藁・煉瓦で家を作る『三匹の子豚』の話は、より身近に感じてくれるのではないかと、さくら寮訪問の前夜、紙にマジックで線描きをしただけの絵を割り箸に付けたペープサートを用意した。しかしながら、実践直前の連絡の中で“在寮生にとって紙は身近にないので提示しても応用が難しい”“木や藁の家の否定につながるのでは”等、同行者から助言をいただいた。急遽、庭先のバナナの葉を1枚いただいてペープサートを作成し、木や藁の家の否定ではなく煉瓦の家を一生懸命建てることの尊さが伝わるような展開に心掛けた。

**◇**1ｍほどのバナナの葉は生き生きみずみずしく、水分を拭けどもマジックがのらない。葉に描いた絵が在寮生に十分見えたか疑問である。葉が乾いた状態であれば白ポスターカラーではっきりと描けるかもしれない。ネパールでよく見かけた赤土を砕いて水に溶けば描けるかもしれない。また、バナナの葉の中心の茎を境に片方は取り除き3匹の子豚の絵を、片方は茎に付けたまま裏表に「作成途中の家」と「出来上がった家」を描き、回転させて場面展開を試みたが、常にテープで張り付けなければならないので効果は十分ではなかった。両端にリングを固定しそこに茎を通すなどの工夫をすれば回転がスムースになり、効果的な場面転換につながるのではないかと思われる。

**４　ネパールの子どもたちに…楽しい保育教材についての一考察**

**【遊び】**

ネパールの子どもは、いったい遊ぶのか？都心部では身ぎれいにして親と一緒に外出したり観光したりしている子どもの姿を見たが、山村部では期待される労働力としての子どもの姿ばかりが目についた。牛を追う少年・小魚を捕る少年・草を運ぶ少女・食器を洗う少女・家族と一緒に田を耕す少女等の姿である。貧困からの脱却・経済基盤の確立がなくては、遊ぶ暇はない。遊べない。

帰国し、ネパールの子どもの遊びについて検索してみた。

こま・石けり・5つの石・チュウギーという蹴鞠・風車・凧揚げ・紙飛行機・横笛・サイコロ・ネパール式チェス・学校で行うガバルディという鬼ごっこ・フィッシュキャッチという室内遊び・マチャブヒューグトという魚と蛙という遊び・手遊び…が挙げられていて、ほっとするものの、この中に子どもによる子どもの遊びは一体いくつあるのだろうかと疑問に思った。

　今回、私が「　　　　小学校」で紹介した遊びは、教師が提供し、教師とのかかわりの中で展開する遊びであった。それらの遊びが十分機能すれば【健康・人間関係・環境・言葉・表現】など総合的に多くの学びをもたらす。やがては子どもたち自身で展開する遊びにもなりうる。しかしまた、現在のネパールの子どもたちの遊びを考えると、むしろ個々の遊びを育てることこそ力を注ぐことが必要なのではと感じる。小石を使ってのおはじき・石けり・ケンケンパー・陣取りなど、地面があって小石があればすぐに始まるような遊び、また何もないところから遊べる鬼ごっこ・歌いながらの手等が適しているのではないだろうか。これらの遊びは一人でも二人でも数人でも遊べ、楽しさは無限であり、学びも大きい。やがて、いや近い将来すぐに、電子機器による遊びの波が彼らの前にも及ぶであろう。シュミレーションではなく、それまでの束の間であろうが遊びの実体験を積み、自ら考え判断し行動する力の基礎を培っていてほしい。この意味からも、労働の合間の少しの時間に、少しだけでも遊んでほしい。

**【教材づくり】**

さくら寮生を対象にした『三匹の子豚』は、実践前夜急遽ペープサートに作った。思えば、制作材料を何も持たない旅先で、簡単に作る手段はまずは紙！という日本感覚そのものであった。“紙はネパールでは身近ではない”という助言を受け、発想を転換し、急遽バナナの葉を使っての視聴覚教材づくりを行ったことについては前述のとおりである。

このことからの学びは、ネパールにおける教材づくり・素材選択についての私自身の研修の結論ともなった。すなわち、紙と割り箸のないネパールで何を代用とするのかではなく、ネパールにある豊かな自然物をいかに生かすかである。ネパールの身近な自然の教材化を図るのが大切なのである。バナナの葉はお面にも洋服にも帽子にもなる！草や木々を素材とした制作は無限に広がる。さくら寮生の隣でバナナの葉から教材制作を行ったが、この活用例が、さくら寮生のこれからのクリエイティブな発想・教材制作にとつながっていってくれることを期待する。

**５　おわりに**

「　　　　　　小学校」ではどの子どもも、クルクル愛くるしい眼差しを向けてくれた。自分たちに何かを提供してくれる対象への期待に満ちた目の輝きに、私自身が応えられたかどうかは疑問として、願わくばこの子どもたちに、この国ネパールに、明るく広い未来が開けますように。

この国の抱える課題はあまりにも大きく、教育、貧困、衛生、自然破壊と災害…ネパール旅行中、ともすればこの厳しい現実に心が重く押しつぶされてしまうような思いであった。しかしながらまた、人と車と牛と犬と鶏と羊と馬と猿と鼠と烏と雀と蜘蛛と蛙と蟻と蠅とヤモリと…共存しながらたくましく生きる様はエネルギッシュ！の一言で、ネパールの底知れない力であることを感じる。そして、この力は開かれゆく未来への力となることを信じたいと思う。ポカラもネパールガンジーもその山間部は斜面のほとんどが段々畑や田んぼであった。どこまでも連綿と続き、その規模は日本の棚田百選の比ではない。この景色を見る限り、ネパールの底知れない力に望みをかけられる。「楽しい保育教材の模索の旅」の最後は、「人間賛歌！」である。人間はすごい！そして、すごい！

　最後に、この機会を与えてくださいましたJNFEAの岩谷先生、様々にご示唆いただき感謝申し上げます。また、同行の藤田雅子先生、近藤蘭子先生、教師として“子どもたちに何かを！”の基本ラインが同じであることを感じました。楽しい時も大変だった時も思いを分かち合えたことは幸せでした。ありがとうございました。JNFEA現地代理人・通訳のクリシュナ・カティワダさん、

私が日本語で表した以上の思いをネパール語で子どもたちに伝えてくださったのではと推察します。また、私たちのネパールの旅が快適なものとなるよう様々にお力添えくださったことにも感謝です。

さくら寮卒業生がロールモデルとなり教育実践を通じて、地域住民に女子の教育を受ける意義を実感させ意識の改革を図り、女子の就学率向上につなげるというJNFEAの実践が大きな成果となって広くネパール中に花開くことを心よりお祈り申し上げます。

* ＊　　　　　＊　　　　　＊　　　　　＊　　　　　＊　　　　　＊

資料１　指導案　　　　資料2　教材と方法　　　資料３　「世界へ踏み出すきっかけとして積極的に英語が学ばれている（パキスタン）」（朝日新聞GLOVE　[World　Views]2014．8．2．）

事前参考文献

　〇『ネパールの算数教育を考える～100人のおなご先生養成のために～』岩谷栄子著

　（日本ネパール女性協会事務局2009）

〇『ネパールで出会った神々―神話の中の町から―』白井有紀著（丸善2000）

　〇『高く遠い夢ふたたび』三浦雄一郎著（双葉社2013）

　〇『冒険家―75歳エベレスト登頂記―』三浦雄一郎著（実業之日本社2008）

　〇『エベレスト登頂請負業』村口徳行著（山と渓谷社2011）

　〇『雪男は向こうからやってきた』角幡唯介（集英社2011）

　〇『ヒマラヤのドンキホーテ―ネパール人になった日本人・宮原崇鬼の挑戦』根深誠著

　　（中央公論2010）

　〇『ネパール（暮らしがわかるアジア読本）』石井薄著（河出書房1997）

　〇『ネパールのこども』写真集（偕成社2013）

　〇『ネパールに学校を建てよう！―建築家のボランティア奮闘記』AFF著（彰国社2014）

　〇『地球の歩き方―ネパール―』

　〇『旅の指さし会話帳ネパール―ネパール語―』野津治仁著（情報センター出版局2002）

ネパール関連の絵本

〇『ロミラのゆめ』金田卓也著（偕成社）

〇『あくまのおよめさん』稲村哲也再話（こどものとも社）

〇『ブンクマインチャ』大塚勇三再話（こどものとも社

〇『雨』中村房子著（石風社）

〇『なかよしミリガ』大塚錦子（アジア絵本の会）

〇『ヒマラヤのニジキジ』クリシュナ・プラサドパラシュリ著（ラトナ出版）

〇『ラタンマヤ』スリルトズビ著（バル・サヒフトヤ・サマズ社）

〇『ナマステこんにちは』トゥーロ・サルガマ著（アジアの絵本）

〇『ずるがしこいジャッカル』テクビル・ムキャ著（蝸牛社・かたつむり文庫）

〇『ネバリ・バザーロ』〇『大空への道』〇『不思議な飲み物』〇『なまけものの魚とり』







